

あきら
渡部 顕 さん

まとい工房 南天
秋田市川尻みよし町9-3
TEL.090-8924-6122
<https://www.nanten64.com>



和風家屋(町火消しの番屋)

本格的に作り始めたのは退職後。浅草・仲見世にある江戸末期創業の玩具店「助六」に売り込みに行き、何十回と作品を送り返されながら店主からの駄目出しに比べ、15年8月に入り職人として認められた。制作に熱中する間に病は回復していった。作品は主に縁起物、誕生や節句の祝い、記念品として求められる。「人命救助に注いだ思いを今度はまといに変えて人に貢献したい」。生と死、自らの病から痛感した命の尊さ、生きる喜び。幸せへの願いを込めて丁寧な精巧な美を追求する。

私のギャラリー

My Gallery

AKIRA WATANABE

ミニチュアまとい

災い払う縁起物



高さ約8.5センチ、幅15センチ、奥行き4センチ

江戸時代に火消しが組の旗印として用いた「まとい」を、災いを払う縁起物としてミニチュア模型に。その大きさ、最小3・5センチ。秋田市の渡部顕さんは、全国でも数少ないまとい専門の玩具職人だ。まといに下がる飾りの馬簾は、裾を広げて「末広がり」、提灯は「前を照らす」、はしごは「上り調子の運氣」、はしごの前の鳶口は「困難を断つ」。二つの飾りに独自の意味を込める。材料は木材や紙で、0・1ミリ単位で切り張りする。完成まで約2週間。ほかに和風家屋の模型も作る。元秋田市消防本部の救急救命士の生と死のはざままで使命感に燃えて現場に出ていた。約30年勤めたが、病になって15年2月に退職した。まといの模型は在職中の2008年ごろ趣味として作り始めた。きつかけは出初め式の際に消防職員が手作りして市民に贈っていたミニまとい。子どもものころから工作が好きで手先を使う作業が得意。自分も作ってみたいと思った。作品を人に贈ったところ、喜ばれて手応えを得た。